

歌の系譜：戦前の東京コーラル・ソサエティ

津 上 智 実

Genealogy of Singing: Tokyo Choral Societies in the First Half of the Twentieth Century

TSUGAMI Motomi

要 旨

本稿の目的は、明治末から昭和戦前期にかけて断続的に存続・活動した合唱団体「東京コーラル・ソサエティ Tokyo Choral Society」の実態と活動歴、その性格と歴史的な意義とを明らかにすることである。

その活動歴を英字新聞『ジャパン・タイムズ』の掲載記事から洗い出して、トライアル期（1908）、第1期（1916-20）、第2期（1922-23）、第3期（1925-35）の4期に区分し、各期の活動の概要と演奏曲目とを明らかにした。その結果、メンデルスゾーンやヘンデルの作品を中心に、日本初演を含む多数のオラトリオや宗教曲を公開演奏したことが判明した。指揮者としてはフロレンス・アイグルハート、ヒュー・ホーン、フレッド・ゲーリーの3名の貢献が大きい。

構成メンバーには英米系のキリスト教宣教師とその妻や娘が多数含まれ、演奏会の多くは福祉施設等のためのチャリティーを目的とするもので、音楽による奉仕という性格を持つ。1927年には邦人メンバーも増え、1932年から日本人指揮者によるオラトリオの定期的な演奏が始まると、そのサポートに回るなど、教会音楽家の育成に寄与した功績が認められる。

キーワード：東京コーラル・ソサエティ、合唱、宣教師、オラトリオ、ジャパン・タイムズ

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the activities, character and historical significance of the Tokyo Choral Society, which met intermittently from the end of the Meiji period to the prewar Showa period.

From articles published in the newspaper *The Japan Times*, its activities were surveyed and divided into four periods, namely, the trial period (1908), the first period (1916-20), the second period (1922-23), and the third period (1925-35). Outlining the ups and downs of the organization's activities, musical works performed on stage in each period were revealed. The first period emphasized such oratorios by F. Mendelssohn, as "Elijah", "Hymn of Praise", and "St. Paul", and the "Requiem" of J. Brahms, the second period by L. Spohr ("The Last Judgement") and G. F. Handel ("Messiah"), and the third by C. Gounod ("Gallia"), T. Dubois ("The Seven Last Words of Christ"), J. Haydn ("The Creation"), J. S. Bach ("Christmas Oratorio"), F. Schubert ("Mass in E Flat"), and G. Rossini ("Stabat Mater"), in addition to Mendelssohn ("Elijah") and Handel ("Messiah"). The performances included their Japan premieres.

As main conductors, Florence Iglehart, Hugh Horn, and Daniel Fred Gearly made contributions.

Choir members included many Anglo-American Christian missionaries and their wives and daughters. Most of the concerts were aimed as charity ones for welfare facilities, etc., clearly having the character of 'service through music'. Its contribution to the cultivation of religious music and church musicians in Japan was especially visible in 1927, when the number of its Japanese members surged, and in 1932, when it started to support the regular performances of oratorio, Handel's "Messiah" by a young Japanese conductor, NAKADA Ugo.

Keywords: Tokyo Choral Society, choir, missionary, oratorio, *The Japan Times*

1) 問題提起

本稿の目的は、明治末から昭和戦前期にかけて断続的に存続・活動した合唱団体「東京コーラル・ソサエティ Tokyo Choral Society」の実態と活動歴を明らかにすると共に、その構成メンバーを俯瞰することによって、この団体の性格と歴史的な意義とを浮き彫りにすることである。それは日本の近代化の過程で展開された音楽活動の中で、従来最も研究が遅れている「合唱」というジャンルについて、これまで見落とされてきた初期の活動の一端を明らかにすることになるだろう。

合唱研究は近年、ようやく目を向けられるようになった分野である。それは「創作様式の発展史」として書かれてきた従来の音楽史記述においては、「これまで常に——意識的に——排除されてきた分野」として、吹奏楽と並んで「音楽史のいわば鬼っ子として、あえて目を背けられてきた」分野の一つとされる（長木誠司 2010, 56）。興味深いことに、明治期から昭和戦前期の「宗教共同体の歌」を論じた論考においても、主として取り上げられているのは仏教界の洋楽演奏であり、キリスト教界に関しては、讃美歌の重要性と唱歌や初期の邦人音楽家への影響とに言及するに留まっている（福本康之 2007, 377-380）。キリスト教界における讃美歌以外の、いわば芸術的な音楽作品の演奏については、これまで全く見落とされているのが研究の現状である。

本稿では、英字新聞『ジャパン・タイムズ *The Japan Times*』の掲載記事を手掛かりに、忘却の淵に沈んでいる古の合唱団体の存在と活動の軌跡とを掘り起こして光を当てることとする。

2) 研究の対象と用語

本稿の研究対象は、英米系のキリスト教宣教師を中心とする「東京コーラル・ソサエティ Tokyo Choral Society」であり、それ以前に存在したドイツ系の「東京合唱協会 Tokio Gesang-Verein」や戦後の「東京合唱協会 Tokyo Choral Society」とは別の団体として区別する。

19世紀末の横浜に「東京合唱協会 (Tokio Gesang-Verein)」というドイツ系の合唱団体があったことが知られるが、これはメンバーが男性に限られていることと、定期的に集まって歌うと共に飲酒の楽しみで交流を図るところに力点がある（ゴチェフスキ 2019, 149-153）という2点において、本稿で扱う「東京コーラル・ソサエティ」とは性格を異にしている。

他に、1906年から1917年まで横浜にドイツ人合唱協会 (German Choral Society) があって、1909年には東京の帝国劇場で慈善演奏会を行ったという報道もあるが (1927-8-13 JT)¹⁾、詳細は不詳である。

「東京コーラル・ソサエティ」という名称は、漢字表記で「東京合唱協会」と訳することも可能ではあるが、戦後の「株式会社 東京合唱協会」との混同を避けるために、「東京コーラル・ソサエティ」というカタカナ表記を選んでいる。

1) 以後、JTは『ジャパン・タイムズ』の略で、先行する数字は記事掲載の年月日を示す。

「東京コーラル・ソサエティ」という団体名称は、1925年6月には「コミュニティ・コーラル・ソサエティ Community Choral Society」、1930年から1932年にかけては「東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティ Tokyo Community Oratorio Society」というように、時に揺れを見せるが、定期演奏会のカウントが連続していることから（後掲の表1参照）、第1期以降については実質的に連続した同一の団体とみなすこととする。

3) 活動歴

東京コーラル・ソサエティに関する『ジャパン・タイムズ』の記事掲載は、1908年から1935年までの28年間に及ぶ。その内、1909年から1915年までは長い空白期間となっている。1916年から1920年にかけては多数の記事が見られ²⁾、活発な演奏活動を行っていたことが知られる。1921年の空白を挟んで、1922年から1923年にかけて再度演奏記録が見られるものの³⁾、1923年9月1日の関東大震災による壊滅的な打撃で、1924年は再び空白となる。その後、1925年から本格的な活動期に入って、1927年前後にピークを迎える⁴⁾。

そこで、東京コーラル・ソサエティの活動について、次の時代区分をするのが適切と考える。

トライアル期（1908）

第1期（1916-20）

第2期（1922-23）

第3期（1925-35）

この時代区分に従って、東京コーラル・ソサエティの公開演奏会の記録を編年順にまとめたものを「表1：東京コーラル・ソサエティの活動歴」として次頁に掲げる。

これに従って、まずは各期の活動の浮沈を概観し、演奏曲目や演奏者等については次節で改めて検討する。

3-1) トライアル期（1908）

「東京コーラル・ソサエティ」の名が記事タイトルとなったのは、1908（明治41）年1月5日のことである。1月7日夜に銀座の教文館ホールで「東京コーラル・ソサエティ」の集まりを持つので、合唱音楽に興味のある人は誰でも是非参加をと呼び掛けている。呼び掛け人は名誉秘書ウォルケ（R. A. Walke）と音楽監督ハイドリッヒ（H. Heydrich）の2名で、ハイドリッヒがオーディションを行うことと、今後は毎週火曜の夜に練習を行うことが告知されている（1908-1-5JT）。1月7日付によれば、すでに4回の練習が持たれたとあり（1908-1-7JT）、定期的な活動を1907年12月から始めていたことが知られる。

2) 掲載記事数は1916年10点、1917年8点、1918年12点、1919年7点、1920年4点。

3) 掲載記事数は1922年1点、1923年7点。

4) 掲載記事数は1925年4点、1926年8点、1927年12点、1928年11点、1930年6点、1931年9点、1932年9点、1933年2点、1934年1点、1935年1点。

表1：東京コーラル・ソサエティの活動歴（縦の括弧＝東京と横浜とのペア上演）

年月日	演奏曲目	指揮者	備考
トライアル			
1908-1-5, 銀座	—	H. Heydrich	結成・選考
第1期			
1916-4-10, HCT	Mendelssohn: Elijah 抜粋	F. Iglehart HC: Bentinck BM: Mr. Mason	新設、35人、 メンバー表(1)
1916-4-24, YUC	同上	同上	
1916-11-30, TTC	—		アメリカ感謝祭の礼拝
1916-12-4, 築地	Handel: Messiah から2曲	A. Drabble	曲目あり
1917-3-24, AGA	Mendelssohn: Hymn of Praise	Hugh Horne	Kobe Orchestra
1917-3-25, YUC	同上	同上	純益1244.89円
1918-3-23, KYM	Mendelssohn: St. Paul	[H. Horne]	Y&KAO
1918-3-24, YUC	同上	同上	同上
1918-12-20, TTC →1919-1-11	Mendelssohn: Hymn of Praise Handel: Messiah の2曲	H. Horne	同上
1918-12-22, YUC →1919-1-12	同上	同上	同上
1919-5-10, 南葵	Mendelssohn: Elijah	[H. Horne]	T&YCS
1919-5-11, YUC	同上	同上	653円
1919-6-6, YAH	同上	同上	Joint CS + O.、503円
1920-3-18, 南葵	Brahms: Requiem 他	H. Horne	550円
第2期			
1922-4-24, KYM		Mr. McKenlay	相談
1923-3-9, KYM	Spohr: The Last Judgement	Mr. McKenlay Acc: H. Horne	40人、メンバー表(2)、 500円
1923-6-3, YCC	Handel: Messiah 抜粋	Hugh Horne	1923-9-1 関東大震災
第3期			
1925-6-14, ACH	Gounod: Gallia Dubois: The Seven Last Words of Christ	Fred Gealy	CCS [第1回] メンバー表(3)
1925-12-20, AJG	Handel: Messiah	同上	TCS [第2回]、曲目あり
1926-4-24, AGA	Haydn: Creation	同上	TCS [第3回]
1926-12-18 →1927-4-16, NSK	Handel: Messiah	同上 BM: Mrs. H. E. Coleman, Mrs. N. K. Roscoe	TCS 第4回、 薨去で延期、メンバー表(4)
1927-12-15, AGC	Mendelssohn: Elijah	Fred Gealy	公開リハーサル
1927-12-16, NSK	同上	同上	TCS [第5回]、 明大 O. 35人、興望館、60人
1927-12-20, YSC	同上	同上	
1928-4-15, 上野		同上	博覧会で放送、曲目あり
1928-5-14, AGC	Brahms: Requiem、他2曲	同上	TCS [第6回]、pf Gealy 在米・学位取得
1930-12-18, KYW	Handel: Messiah	同上	TCOS 第7回、pf, Vn,
1931-3-27, KYW	Students rehearsal		
1931-3-28, KYW	Brahms: Requiem		
1931-3-30, YFS	同上	同上	TCOS [第8回]、pf
1931-12-10, YFS	Bach: Christmas Oratorio	同上	TCOS 第9回、50人、pf
1931-12-12, HCT	同上	同上	
1932-6-3, AJG	Schubert: Mass in E Flat	同上	TCOS [第10回]
1932-12-8, YFS	Rossini: Stabat Mater 他	同上	TCOS 第11回、pf
1932-12-10, HCK	同上	同上	
1935-4-20, YCC	Stainer: The Crucifixion	同上	Good Friday、30人、Org.

団体略号

CCS = Community Choral Society
TCOS = Tokyo Community Oratorio Society
TCS = Tokyo Choral Society
T&YCS = Tokyo and Yokohama Choral Society
Y&KAO = Yokohama and Kobe Amateur Orchestra

会場略号

ACH = American Community House
AGC = Aoyama Gakuin Chapel
AGO = Aoyama Gakuin Auditorium
AJG = Aoyama Jo Gakuin
HCT = Hongo, Central Tabernacle (Chuo kaido)
KYM = Kanda YMCA Hall
KYW = Kanda YWCA
NSK = Nihon Seinen Kwan
TTC = Tsukiji, Trinity Cathedral
YAH = Yokohama Assembly Hall
YCC = Yokohama Christ Church
YFS = Yokohama Ferris Seminary
YSC = Yokohama Shiro Church
YUC = Yokohama Union Church

ヘルマン・ハイドリッヒ Hermann Heydrich (1855-?) はプロイセン出身の音楽家で、1902 (明治35) 年から1909 (明治42) 年まで東京音楽学校の外国人教師を務めていた人物である⁵⁾。1909年に東京音楽学校を満期退職したこともあってか、その後、この団体に関する報道は見られず、特段の演奏機会を持ったとは考えにくい。立ち上げを試みたものの、軌道に乗せるところまでは行かなかった様子なので、「トライアル期」と位置付ける。

3-2) 第1期 (1916-20)

次に「東京コーラル・ソサエティ」が紙面に現れるのは、8年後の1916年のことである。

1916年4月11日付の記事は、前夜に本郷中央会堂で行われた「東京コーラル・ソサエティ」の演奏会について報じている。演奏曲目はフェリックス・メンデルスゾーン Felix Mendelssohn (1809-1847) 作曲のオラトリオ《エリヤ Elijah》抜粋で、「我々の記憶が正しければ、東京で外国人のアマチュアたちによってオラトリオが演奏されるのは、これが最初である」(1916-4-11 JT) と位置付けられている。

演奏した「東京コーラル・ソサエティ」については「新たに組織されたソサエティ」と記されており、トライアル期のものとは別団体と考えられている。指揮は C. W. アイグルハート夫人⁶⁾、オルガン伴奏は H. C. ハナフォード、名誉秘書はベンティンク伯爵、ビジネス・マネジャーは J. メーソンで、横浜から2名のヴァイオリン奏者が賛助出演してオブリガートを演奏したとあり、オルガンとヴァイオリン2本による伴奏であったことが知られる。

この記事は、今回の成果を踏まえて今後とも活動を続けてほしいとの希望を述べており、合唱メンバー (35人) を含めて、全出演者の名前を掲げている (後掲の表3-1参照)。

2週間後に横浜ユニオン教会でも《エリヤ》を上演し、「この街 [横浜] でそもそも演奏された最初のオラトリオ」と評されている (1916-4-25 JT)。東京同様、横浜でも多くの聴衆が詰めかけたが、その中にはもう一度聞きたいとか、聞き逃したので聞きたいと東京から駆けつけた人もかなりの数いたという。指揮者の C. W. アイグルハート夫人について、「この相当に複雑な合唱曲の数々を指揮して、優れた能力と大きな成果を収めた」と高く評価しているのも注目される。

翌日の紙面には、今後の練習計画と新メンバー募集の記事が掲載されており、東京と横浜の成果を踏まえて機運が盛り上がっていることが察せられる。練習会場は「いつも通り」青山学院の E. アイグルハート夫人⁷⁾宅とある (1916-4-26 JT)。

6月21日には夏期休会が告知され、併せて10月の第一金曜から「いつも通り」青山学院のア

5) 東京藝術大学大学史料室 HP 掲載「音楽取調掛と東京音楽学校の外国人教師たち」の「ヘルマン・ハイドリヒ」の項 (<https://archives.geidai.ac.jp/contents/1-2/>) による。

6) 後掲のメンバー表 (表3) に記載のある出演者名については、原綴を文中で省略する。

7) E. アイグルハート (1878-1964) と C. W. アイグルハート (1882-1969) との兄弟は、いずれもアメリカ・メソジスト監督教会の宣教師で、青山学院等で教鞭を執っていた。専門は聖書学だが、音楽にも優れ、讃美歌集の編纂や舞台での独唱を行っている。その夫人たち、すなわち E. アイグルハート夫人ルエッラ Luella (Mrs. E. T.) Iglehart (1881-1966) も、C. W. アイグルハート夫人フロレンス Florence (Mrs. C. W.) Iglehart (1884-1958) も、共に音楽教師の経歴を持つ人物であり (クランメル 1996, 128-129; 鈴木範久 2020, 10)、第1期の活動を支えた主要メンバーであったと目される。

イグルハート夫人宅で練習を再開すると予告されている（1916-6-21 JT）。

同年秋のアメリカ感謝祭（1916-11-30）には、依頼を受けて、築地トリニティ教会の礼拝で音楽奉仕を行っている（1916-11-23, 25, 28 JT）。

12月4日にはゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデル G. F. Handel（1685-1759）作曲のオラトリオ《メサイア Messiah》から〈かくして主の栄光は And the Glory of the Lord〉と〈神に栄光 Glory to God〉の合唱曲2曲をドラッブル A. C. Drabble の指揮とハナフォードの伴奏とで演奏した（1916-12-5 JT）。

2年目の1917年には、3月24日に東京の青山学院講堂で、翌25日に横浜ユニオン教会でメンデルスゾーン作曲《讃歌 Hymn of Praise》⁸⁾を演奏し、神戸のイギリス副領事ヒュー・ホーン Hugh Horne（1878-1923）が率いる神戸オーケストラ（Kobe Orchestra）が賛助出演した（1917-3-24 JT）。

3年目の1918年には、3月23日に神田基督教青年会館で、翌24日に横浜ユニオン教会でメンデルスゾーン作曲のオラトリオ《聖パウロ St. Paul》を演奏し、横浜と神戸のアマチュア・オーケストラ（Yokohama and Kobe Amateur Orchestra）が伴奏を担った（1918-3-1 JT）。

同年秋にも青山学院のアイグルハート夫人宅で練習を行い（1918-11-26 JT）、12月20日には築地トリニティ教会で、同月22日には横浜ユニオン教会で、メンデルスゾーン《讃歌》に加えてヘンデル《メサイア》からの2曲を、ホーンの指揮、横浜と神戸のアマチュア・オーケストラの伴奏で演奏している（1918-12-11 JT）。

4年目の1919年には、5月10日に南葵音楽堂で、翌11日に横浜ユニオン教会で、メンデルスゾーン《エリヤ》を演奏し、さらに救世軍から援助を求められて、6月6日に横浜公会堂で同曲を再演した⁹⁾（1919-5-28 JT）。

5年目の1920年には、3月18日に南葵音楽堂でヨハネス・ブラームス Johannes Brahms（1833-97）作曲の《[ドイツ・] レクイエム Requiem》を中心とする演奏会をホーン指揮で行った（1920-3-11 JT）。

このように1916年の発足以来、5年間に亘って定期的に演奏活動を展開してきた東京コーラル・ソサエティは、ここで2年間の休止期間を迎える¹⁰⁾。

8) 独唱と合唱付きの交響曲第2番（1840）の第2部。9曲の合唱曲から成る。新聞記事ではしばしば「オラトリオ」と記載されている。

9) 1919年5月10日の《エリヤ》演奏には「東京と横浜のコーラル・ソサエティのメンバーたち members of the Tokyo and Yokohama Choral Society」の参加が呼びかけられ（1919-5-31 JT）、6月6日の《エリヤ》再演については「合同コーラル・ソサエティとオーケストラ Joint Choral Society and of the Orchestra」と（1919-6-7 JT）「指導者ホーン氏」への謝辞が述べられているので（1919-6-12 JT）、これら3回の演奏のいずれについてもホーン指揮のオーケストラ伴奏であっただろうと考えられる。

10) ここで休止した理由に関する報道記事は残念ながら見当たらないが、1920年10月5日から14日まで第8回世界日曜学校大会が東京で開かれて、キリスト教関係者はその準備と運営、さらに報告書の出版（1921年）で忙殺されていたと考えられる。

3-3) 第2期 (1922-23)

第2期は2年後の1922年に始まる。同年4月24日付の紙面において、東京にコーラル・ソサエティを作るための話し合いを神田基督教青年会館で持つので、興味のある人は誰でも参加してほしいという告知がなされ、「マッケンレー氏がそのような〔合唱〕協会を指導することに同意してくれた」と報道されている(1922-4-24 JT)。

翌1923年3月9日に神田基督教青年会館でルイ・シュポア Louis Spohr (1784-1859) 作曲のオラトリオ《最後の審判 The Last Judgement》を J. R. マッケンレーの指揮とホーンの伴奏で演奏したが(1923-3-9 JT)、3月16日の夜に会合を開いて、最終実施報告を行うと共に「当面、この組織を継続するかどうかを決定する¹¹⁾」と報じられた。この話し合いの結果がどうなったかは報道されていないが、その後、同団の活動に関する報道がないところを見ると、当分休止することになったのかと思われる。

一方、同年6月に「ホーン氏の合唱団」(1923-5-28 JT) がヘンデルの《メサイア》抜粋を横浜キリスト教会で演奏している。合唱団の名称は挙げられていないが、「横浜と東京の様々な教会のメンバーによる約40名」(1923-6-4 JT) とあるので、東京コーラル・ソサエティとメンバーが重複している可能性が高い。

アマチュア合唱団では運営方針を巡って意見の対立が起こることがしばしばあり、その際の最も一般的な解決法は分割して別の合唱団を作ることであったとされており(Krehbiel 1884, vi-vii)、ニューヨークのみならず、日本でも同様の動きがあった可能性も考えられる。

続いて、「ホーン氏は東京でメサイアを演奏する気はないかと尋ねられた」との記事(1923-6-7 JT) があるが、これは同年9月1日の関東大震災で実現しなかった。

3-4) 第3期 (1925-35)

関東大震災による空白期間を経て、次に演奏記録が見られるのは2年後の1925年となる。

1925年6月14日に下渋谷のアメリカン・コミュニティ・ハウス American Community House において、シャルル・グノー Charles Gounod (1818-93) 作曲のモテット《ガリヤ Gallia》とテオドール・デュボア Theodore Dubois (1837-1924) 作曲のオラトリオ《キリストの最後の7つの言葉 The Seven Last Words of Christ》とを F. ゲーリー¹²⁾の指揮で演奏した。

この時の団体名称は「コミュニティ・コーラル・ソサエティ」で、その第1回演奏会に当たるが、「1923年以来、活動を停止していた東京コーラル・ソサエティが、今夜、2つのオラトリオを演奏する時、地震前の組織が蘇るもう一つの例が見られるだろう¹³⁾」と報じられており、明らかに震災前の東京コーラル・ソサエティの復活と目されている。

同年12月には青山女学院大講堂で《メサイア》全3部の通し演奏をゲーリー指揮で行ったが、

11) 'it will be decided whether or not to continue the organization for the present.' (1923-3-15 JT)

12) フレッド・ダニエル・ゲーリー Fred Daniel Gealy (1894-1976) はアメリカ・メソジスト監督教会の宣教師で、1923年9月1日に来日して青山学院で新約聖書を教えたが、優れた音楽家でもあり、帰米後も複数の大学で教会音楽を教えた。

13) 'Another revival of pre-earthquake institution will be seen this evening when the Tokyo Choral Society, which has been inactive since 1923 will give two oratorios.' (1925-6-14 JT)

こちらは「東京コーラル・ソサエティ」の〔第2回〕公演と報じられており（1925-12-17JT）、同じゲーリー指揮でも合唱団の名称が揺れていることが知られる。

その後、1926年4月24日のヨーゼフ・ハイドン J. Haydn (1732-1809) 作曲のオラトリオ《天地創造 Creation》上演は「東京コーラル・ソサエティ」の〔第3回〕公演（1926-4-19JT）、同年12月18日に予定されていた《メサイア》再演（12月25日の大正天皇薨去のため翌春4月16日に延期）は同第4回公演（1927-4-15JT）、1927年¹⁴⁾12月16日の《エリヤ》上演は同〔第5回〕公演（1926-12-3JT）、1928年5月14日のブラームス《レクイエム》上演も同第6回公演と報じられており（1928-5-15JT）、「東京コーラル・ソサエティ」という表記への揺り戻しが見られる。

その後、1929年には演奏の報道が見られないが、これは指揮者のゲーリーが学位取得のために帰米して不在だったためと理解される（詳細後述）。

ゲーリーの帰日後、団体の名称が「東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティ」と変更されたものの、定期演奏会のカウントは「東京コーラル・ソサエティ」時代から続いており（表1参照）、第7回が1930年12月10日の《メサイア》再演（1930-12-12JT）、その次〔第8回〕が1931年3月30日のブラームス《レクイエム》上演（1931-3-28JT）、第9回が1931年12月10日のヨハン・ゼバスティアン・バッハ J. S. Bach (1685-1750) 作曲《クリスマス・オラトリオ Christmas Oratorio》上演（1931-12-12JT）、その次〔第10回〕が1932年6月3日のフランツ・シューベルト Franz Schubert (1797-1828) 作曲《ミサ曲 Mass in E Flat》第6番の上演（1932-5-17JT）、第11回が1932年12月8日のジョアッキノ・ロッシーニ G. Rossini (1792-1868) 作曲《スタバト・マーテル Stabat Mater》他の上演（1932-12-4JT）と継続している。

ゲーリー指揮による演奏は、1935年4月20日のジョン・シュタイナー John Stainer (1840-1901) 作曲《磔刑 The Crucifixion》¹⁵⁾ が最後であり（1935-4-20JT）、翌1936年、ゲーリーは帰米している。

4) 演奏曲目

次に、改めて演奏曲目を検討する。東京コーラル・ソサエティが公開演奏会で演奏した楽曲を、初演奏順に整理したものを「表2：東京コーラル・ソサエティの演奏曲一覧（初演奏順）」として次頁に掲げる。

これを見ると明らかなように、活動の初期に集中して取り上げられたのはメンデルスゾーン作品である。1916年にオラトリオ《エリヤ》、1917年に「オラトリオ¹⁶⁾」《讃歌》、1918年にオラトリオ《聖パウロ》と次々と取り上げており、さらに1919年に《讃歌》と《エリヤ》を再演している。加えて1920年にはブラームスの《ドイツ・レクイエム》が演奏された。以上が第

14) この年の11月28日に行われた日本音楽連盟主催の第1回合唱コンクールで、ゲーリー指揮東京コーラル・ソサエティは優勝し、賞品のアップライト・ピアノを獲得した（1927-11-30JT）。

15) これは聖金曜日に横浜キリスト教会で演奏されたもので、「30人に拡大された合唱団 an augmented choir of 30 voices」との報道しか見当たらないが、ゲーリーの指揮の下、東京と横浜のコーラル・ソサエティが関わった可能性が高いと考えて、この系譜の最後に加えた。

16) 記事では「オラトリオ」と明記されている。

表2：東京コーラル・ソサエティの演奏曲一覧（初演奏順）（＊＝抜粋演奏、網掛＝第2期）

作曲家	作品	演奏日	指揮者
F. Mendelssohn	Oratorio: Elijah (1846)	1916-4-10, 24＊ 1919-5-10, 11 1919-6-6 1927-12-16, 20	F. Iglehart H. Horne H. Horne F. Gealy
同上	Hymn of Praise (1840)	1917-3-24, 25 1919-1-11, 12	H. Horne H. Horne
同上	Oratorio: St. Paul (1836)	1918-3-23, 24	H. Horne
J. Brahms	[Deutsch] Requiem (1868)	1920-3-18 1928-5-14 1931-3-28, 30	H. Horne F. Gealy F. Gealy
L. Spohr	Oratorio: The Last Judgement (1826)	1923-3-9	J. McKenlay
G. F. Handel	Oratorio: Messiah (1741)	1923-6-3＊ 1925-12-20 1926-12-18 1927-4-16 1930-12-10, 11	H. Horne F. Gealy 薨去で延期 F. Gealy F. Gealy
C. Gounod	Motet: Gallia (1871)	1925-6-14	F. Gealy
T. Dubois	Oratorio: The Seven Last Words of Christ (1867)	1925-6-14	F. Gealy
J. Haydn	Oratorio: The Creation (1798)	1926-4-24	F. Gealy
J. S. Bach	Christmas Oratorio (1734)	1931-12-10, 12	F. Gealy
F. Schubert	Mass in E Flat [No. 6] (1828)	1932-6-3	F. Gealy
G. Rossini	Stabat Mater (1832)	1932-12-8, 10	F. Gealy
J. Stainer	Cantata: The Crucifixion (1887)	1935-4-20	F. Gealy

1期の演奏曲である。

第2期には、1923年3月にシュポアのアラトリオ《最後の審判》、同年6月に「ホーン氏の合唱団」がヘンデルのアラトリオ《メサイア》の抜粋演奏を行った。《メサイア》上演を東京でもという動きがあったことが報道記事から知られるが（1923-6-7JT）、これは関東大震災による指揮者ホーンの突然死によって潰えた。

震災後の空白期間を経て、第3期に入ると、ゲーリーの指揮の下、次々とレパートリーを広げていった。まず1925年6月にグノーのモテット《ガリヤ》とデュボワのアラトリオ《キリストの最後の7つの言葉》とを組み合わせ、同年12月には《メサイア》全3部の通し演奏を行った。1926年にはハイドンのアラトリオ《天地創造》を上演し、1927年の《メサイア》と《エリヤ》の再演、1928年と1931年の《ドイツ・レクイエム》再演を挟んで、1931年にバッハの《クリスマス・アラトリオ》、1932年6月にシューベルトの《ミサ曲》第6番 変ホ長調、同年12月にロッシニの《スタバト・マーテル》他を舞台に乗せている。1936年に帰米したゲーリーが日本の舞台で最後に指揮したのは、イギリスの作曲家シュタイナーのカンタータ《磔刑》であった。

これらの多くは日本初演であった可能性が高い。1925年にヘンデル《メサイア》全3部の通し演奏を本邦初演したのも、ゲーリー指揮によるこの団体である。シューベルトの《ミサ曲》についても「この作品が東京で演奏されるのは初めて¹⁷⁾」と報道されている（1932-5-17, 6-3

17) 'This will be the first time that this beautiful composition has been produced in Tokyo.'

JT)。とりわけラジオ放送の開始前で輸入レコードが高価であった時代に、主要なオラトリオや宗教曲の数々を舞台上で実際に鳴り響かせてくれたのは、当時の日本の楽界に対する大きな貢献であったと言ってよい。

1926年12月予定の《メサイア》再演に際しては、1000人に及ぶ「日本人の紳士とその妻に招待状」を送付した他、日曜日の新交響楽団の演奏会でチラシ1000枚を配布し（1926-12-5JT）、さらに開演1時間前からは日本語で楽曲と主要な歌詞の説明を行うという計画が実行委員会によって立案されて（1926-11-25JT）、着々と準備が進められていた。楽曲を聴く機会として日本人に対しても広く門戸を開くと共に、その内容の理解を広めることにも心を砕いており、この点で積極的な貢献をしたことは記憶されてよい¹⁸⁾。

演奏会前日のゲネプロを「学生コンサート」として公開したり、半額の学生券を準備したり、といったことも、同様の努力の現れとすることができる。

5) 演奏形態

まず合唱の規模を見ると、第1期の初回（1916-4-10）は35人（内訳はソプラノ11人、アルト8人、テノール7人、バス9人¹⁹⁾）、第2期の初回（1923-3-9）は46人（内訳はソプラノ19人、アルト11人、テノール9人、バス7人）であったのに対して、第3期の初回（1925-6-14）は21人（内訳は女声13人、男声8人）と半減しており、関東大震災の爪痕が大きい。その後、第4回（1927-4-16）は55人（内訳はソプラノ15人、アルト13人、テノール13人、バス14人）、第5回（1927-12-16）は60人（内訳不詳）と順調に伸びている。第9回（1931-12-10）について50人（内訳不詳）と報道されているので、概ねこの前後の人数で推移したものと考えられる。

次に、伴奏の形態を見ると、上述のように、第1期の初回（1916-4-10）はオルガンとオブリガートのヴァイオリン2本によるものであったが、翌1917年には神戸のイギリス副領事のヒュー・ホーンが「神戸オーケストラ」を率いて参画し、1918年にはそれが「横浜&神戸アマチュア・オーケストラ」へと拡大されて、次第に拡充されていった様子が窺われる。1919年5月の《エリヤ》演奏の際には、「神戸、仙台、横浜と東京」から演奏者が集まったことが報じられている（1919-6-7JT）。

一方、第3期に入ると、震災後の厳しい状況の中、最初の2年間はピアノ伴奏で演奏会を行っている。第5回（1927-12-16）で明治大学オーケストラ（35人）と共演するが、思うような結果が出なかったのか、継続には至らず、その後の演奏会は基本的にピアノ伴奏で行われて、必要に応じてオブリガート・ヴァイオリンが加えられた。

ホーンがオーケストラに力を注ぐ指揮者であったのに対して、ゲーリーは合唱に情熱を注ぐ指揮者であったように思われる。

18) 東京芸術大学附属図書館所蔵の「小山作之助旧蔵 演奏会プログラム等コレクション」に、この《メサイア》再演時のプログラムが含まれるのは、1000人の「日本人紳士とその妻」の一人として小山作之助が招待されたためと思われる。

19) 内訳の人数等については、後掲の表3参照。

6) 演奏メンバー

演奏者に関する報道として、ソリストや指揮者は言及されるのが通例であるが、合唱団の個々のメンバーまで言及されるのは稀なことである。幸い、東京コーラル・ソサエティの第1期の初回（1916-4-10）、第2期の初回（1923-3-9）、第3期の初回（1925-6-14）と同第4回（1927-4-16）については、合唱メンバーを列挙した記事が残されている。

これを整理したものを「表3：演奏メンバー表」として以下に掲げる。

表3：演奏メンバー表

表3-1：メンバー表(1)：TCS 1916-4-10, Mendelssohn: “Elijah” 抜粋 (S11+A8+T7+B9=35人)

声	氏名（妻＝宣教師の妻、娘＝宣教師の娘）（網掛は宣教師）
S	Mrs. Davey [妻], Mrs. C. W. Iglehart [妻], Mrs. Mason, Miss Bryan [娘], Constance Chappell [MCC], Mary Chappell [MEC], <u>Lena Daugherty [PN]</u> , Miss Hall [娘], Miss McKenzie [娘], Miss Nagai, Caroline Schereschewsky [PE]
A	Mrs. Dowie [妻], Mrs. Phipps, Mrs. Purvis, Mrs. Spackman [妻], Katherine Fanning [ABCFM], Miss Struthers, Miss T. Williams [SPG], Mrs. E. Iglehart [妻]
T	P. Davey [CC], Mr. A. Drabble, <u>E. T. Iglehart [MEFB]</u> , J. V. Martin [MEFB], W. Nagai, <u>N. C. Roscoe</u> , P. F. Schaffner [RCUS]
B	Count C. Bentinck**, H. H. Coates [MCC], G. C. Converse [YMCA-A], C. S. Davison [MECS], Kenneth Dowie [CP], <u>C. W. Iglehart [MEFB]</u> , Capt. F. T. Lurcock, J. D. Mason*, G. H. Phipps
独	S: Mrs. Schaffner [妻], A: Mrs. Campbell [妻], T: C. B. Kinnes, W. Nagai, <u>N. K. Roscoe</u> , B: F. S. Coldhester, Org: <u>H. D. Hannaford [PN]</u> , Vn: Mrs. E. C. Davis, C. H. Thorn, C: <u>Mrs. C. W. Iglehart [妻]</u>

** = Honorary Secretary, * = Secretary, 独 = 独唱者等（以下同様）

表3-2：メンバー表(2)：TCS 1923-3-9, Spohr: “The Last Judgement” (S19+A11+T9+B7=46人)

声	氏名（妻＝宣教師の妻、娘＝宣教師の娘）（網掛は宣教師）
S	Miss Grace, Grace Babcock [ABCFM], Florence V. Buss [RCA], Annie Bishop [MCC], Mrs. L. V. Allen, Mrs. J. H. Bunton, Miss D. F. Bunton, Mary Chappell [MEFB], Mrs. W. H. Clarke [妻], Rosamond H. Clark [ABCFM], Flora Darrow [RCA], Katherine Drake [MCC], Stella M. Graves [ABCFM], Ethel Hempstead [MPW], Mrs. W. H. Inde [妻], Mrs. A. Jackson, B. I. Megaffin [MCC], Mabel R. Schaeffer [PE], Mrs. W. R. F. Stier [妻]
A	Constance Chappell [MCC], Miss Nao Chino, Grace Curtis [PN], <u>Lena Daugherty [PN]</u> , Bernice Kent [UGC], Hisa Koike, Edna B. Murray [PE], M. Nishio, Mrs. A. G. Rowe [UGC], Mrs. John Ter Borg [妻], Miss Shizu Takano
T	<u>E. T. Iglehart [MEFB]</u> , V. C. Aurell, A. Jackson, J. S. Kennard, Jr. [ABF], J. V. Martin [MEFB], S. Masumoto, H. V. S. Peeke [RCA], <u>N. K. Roscoe</u> , W. R. F. Stier [YMCA-A]
B	J. H. Bunton, J. H. Covett, G. W. Lang [RC], A. A. Leininger [EC], L. Singleton [EMP], R. H. Stanley, P. P. W. Ziemann [RC]
独	S: Mrs. H. A. Sheeburger, A: Miss Ruth Trimble, T: A. R. Cranch, B: H. H. Campbell, Acc: Hugh Horn, C: <u>J. Roy McKenlay</u>

表3-3：メンバー表(3)：TCS 1925-6-14, “Gallia” + “The Seven Last Words of Christ” (F13+M8=21人)

声	氏名（妻＝宣教師の妻、娘＝宣教師の娘）（網掛は宣教師）
女声	Mrs. Hansen, Mrs. Brumbaugh [妻], Mrs. Iglehart [妻], Mrs. McCoy [妻], Mrs. Rosen, <u>Lena Daugherty [PN]</u> , Dora Wagner [MEFB], Miss Goodman, Martha Gibson [UCMS], Constance Chappell [MCC], Miss Benninghoff, Eleanor Robertson [YWCA], Orpha M. Coe [MEFB]
男声	Gerald Mokma [RCA], Mr. Nagai, Paul F. Warner [MP], Mr. Suzuki, T. T. Brumbaugh [MEFB], Mr. Tanaka, A. A. Leininger [EC], P. P. Ziemann [ABF]
独	S: Mrs. Mitsuma（三浦牧子）, T: <u>E. T. Iglehart [MEFB]</u> , B: <u>Roy D. Mackenlay</u> , Pf: H. C. Hannaford [PN], C: Fred G. Gealy [MEFB]

表3-4：メンバー表(4)：CCS 1927-4-16, Handel: “Messiah” (S15+ A13+ T13+ B14=55人)

声	氏名（妻＝宣教師の妻、娘＝宣教師の娘）（網掛は宣教師）
S	I. Alexander [娘], Mrs. Boyd-Bowman, Orpha Coe [MEFB], T. Costa, Marth Harder [LCA], Misako Hiraoka, Nellie Hyre [YMJ], M. Iglehart [娘], Suzuyo Imamura, Bernice Kent [UGC], E. Kressler, Hanaye Kurihara, Makiko Mitsuma, Nui Morimoto (森本縫), J. Palmer [UCMS]
A	Georgene Bowen, Henrietta Cook [RCUS], <u>Lena Daugherty [PN]</u> , Bertrude Hamilton [MCC], Helen Hurd [UGC], Mrs. E. T. Iglehart [妻], Fusa Ito, Marion Perkins [PN], Dorothy Robson, Mrs. N. K. Roscoe, Dora Wagner [MEFB], N. Caus-Wilson, Michi Yamaka
T	H. E. Coleman [WSSA], R. H. Fisher [ABF], <u>E. T. Iglehart [MEFB]</u> , C. P. Kane, E. Kashiara, <u>N. C. Roscoe</u> , L. Scott-White, H. Tamama, S. Tsugita, J. H. Wild, H. Yagi, T. Yamaguchi (山口隆俊), A. Yoshida
B	Gordon T. Bowles, C. Dykhuizen [RCA], T. F. Haertle, M. Himeno, <u>J. Roy MacKenlay</u> , A. Morikawa, T. Okamoto, J. W. Palmer, J. Robson, M. Sano, Mitsumi Sato, F. Seki (関不二雄), S. Yokomae, Stewart Young
独	S: Netke-Loewe, A: <u>Lena G. Daugherty [PN]</u> , T: Graham Batter, B: <u>J. R. MacKenlay</u> , Pf: Chester G. Curtiss, C: <u>Fred D. Gealy [MEFB]</u>

宣教団体の略号（CM1915, CM1916, CM1925, CM1928）

ABCFM	(= American Board of Commissioners for Foreign Missions) アメリカン・ボード
ABF	(= American Baptist Foreign Missionary Society) アメリカ聖公会海外伝道協会
CC	(= Mission Board of the Christian Church)
CP	(= Canadian Presbyterian Church)
EC	(= Evangelical Church of North America)
EPM	(= Foreign Missions of the Presbyterian Church of England) 英国長老派教会
LCA	(= Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America) アメリカ統一ルーテル教会海外宣教委員会
MCC	(= Methodist Church of Canada) カナダ・メソジスト教会
MEC	(= Methodist Episcopal Church, East Japan Mission)
MECS	(= Methodist Episcopal Church, South)
MEFB	(= Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church) メソジスト監督教会
MP	(= Board of Foreign Missions of the Methodist Protestant Church)
MPW	(= Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Protestant Church)
PE	(= Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in America)
PN	(= Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church) 長老派宣教委
RC	(= Roman Catholic Church) ローマ・カトリック教会
RCA	(= Reformed Church in America) アメリカ改革派教会
RCUS	(= Reformed Church in the United States) 合衆国改革派教会
SPG	(= Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts)
UCMS	(= United Christian Missionary Society) 統一キリスト教宣教師協会
UGC	(= Universalist General Convention) 普遍救済主義総会
WSSA	(= World's Sunday School Association) 世界日曜学校協会
YMC-A	(= Yong men's Christian Association, American National Council)
YMJ	(= Yotsuya Mission) 四谷ミッション
YWCA	(= Young Women's Christian Association of the United States of America)

表3で網掛は宣教師である。名前の後の括弧に派遣元の宣教団体の略号を記し、下に略号表を記載している。これを見ると分かるように、アメリカ、英国、カナダ等の組合派、長老派、メソジスト派、さらにはローマ・カトリック教会など、様々な団体から派遣された宣教師たちが集まっていることが分かる。会派を超えた国際的な連携が、神を讃える合唱曲を歌うという目的の下で実現されていることが如実に見て取れる。

また、第1期から第3期を通じて、繰り返し名前が現れる人物がいる。女声ではアイグルハート夫人やレナ・ドウエルティ、男声ではE. T. アイグルハート、J. R. マッケンレーやN. K. ロスコーといった人物である（表3で波線下線）。彼らはあるいは指揮者、あるいは独唱者、あるいはチケット販売担当者等として、影になり日向になりながら東京コーラル・ソサエティを支えてきた中心メンバーと見ることができる。

表3をよく見ると、女声メンバーには女性宣教師に加えて、男性宣教師の妻や娘が相当数含まれている。これを明示するために、男女別にまとめた「表4：合唱メンバーの所属グループ別人数」を次に掲げる。

表4-1：合唱メンバーの所属グループ別人数（女声）

年月日	宣教師	妻	娘	その他の外国人	邦人	合計
1916-4-10	6	5	3	4	1	19
1923-3-9	17	4	0	5	4	30
1925-6-14	6	3	0	4	0	13
1927-4-16	11	1	2	7	7	28
計	40	13	5	20	12	90

表4-2：合唱メンバーの所属グループ別人数（男声）

年月日	宣教師	その他の外国人	邦人	合計
1916-4-10	9	6	1	16
1923-3-9	9	6	1	16
1925-6-14	5	0	3	8
1927-4-16	4	10	13	27
計	27	22	18	67

ここから、女声の場合にはメンバーの過半を宣教師とその関係者が占めていることが一目瞭然である。男声の場合には、年代が下るにつれて、次第に宣教師が数を減じて、「その他の外国人」（企業の勤め人等）と人数の多寡が逆転している。

1927年春には日本人メンバーが大幅に増えていることが注目される。女声もそうだが、とりわけ男声にこの傾向が顕著に見られる。同年12月の《エリヤ》上演時の記事にも、「合唱は60名近く、東京と横浜の外国人コミュニティを代表すると同時に、日本人のメンバーがかなりの人数含まれている²⁰⁾」（1927-12-19 JT）とあり、日本人メンバーの増加が顕著に認められていたことが知られる。これは1920年の第8回世界日曜学校大会（東京大会）を機に教会音楽に目覚めた日本人の教会関係者²¹⁾が、その後、着実に育ってきたことを示しているものと考えることができる。

7) 演奏の目的

特筆すべきこととして、東京コーラル・ソサエティによる演奏会は、その大半がチャリティー・コンサートで、社会福祉施設等の拡充を図るための資金集めの機会とされた点が挙げ

20) ‘The chorus itself of nearly sixty people, besides representing both the Tokyo and Yokohama foreign communities, has quite a large Japanese membership.’

21) 津上智実「ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の日本初演——その実態と成立の経緯——」（日本音楽学会機関誌『音楽学』で査読中）で論じている。

られる。

これは殊に第1期に顕著で、1916年の《エリヤ》上演は「ジョージ5世国王誕生日基金のため²²⁾」、1917年の《讃歌》上演の収益1244円89銭は「赤十字病院ベッド拡充のジョージ5世国王誕生日基金のため²³⁾」に献じられ、1918年の《聖パウロ》上演の収益金は「ジョージ国王誕生日基金（赤十字）とアメリカ赤十字基金とで折半²⁴⁾」された。1919年の《エリヤ》再演の収益金503円は救世軍のため（1919-6-12 JT）、1920年のブラームス《レクイエム》上演の収益550円は「シベリア抑留者のため²⁵⁾」に捧げられた。

第2期の1923年にもシュポアの《最後の審判》上演の収益500円が東京ユニオンチャーチ・コミュニティハウス建設基金に寄付され²⁶⁾、第3期の1927年にも《エリヤ》上演の収益は貧しい子どもたちのための興望館セツルメント事業に当てられると告知され²⁷⁾、さらに、このような寄付は東京コーラル・ソサエティでは慣例になっていると報じられている（1927-12-12 JT）。

ここには「音楽による奉仕」という性格をはっきりと見て取ることができる。

とりわけ印象的なのは、1919年6月6日に横浜公会堂で《エリヤ》再演の折、横浜や東京、神戸や仙台から駆けつけた演奏者たちが、交通費等の必要経費を自己負担することで救世軍への募金に協力したと、特記して感謝されていることである²⁸⁾。自分の音楽的な能力や時間を捧げるだけでなく、交通費等の金銭的な負担まで引き受けるところに、無私の精神の発露を見る思いがする。言葉の本来的な意味において「アマチュア」の面目躍如と言える。

8) 結論：歌の系譜

本稿の目的は、明治末から昭和戦前期にかけて断続的に存続・活動した合唱団体「東京コーラル・ソサエティ」の実態と活動歴、その性格と歴史的な意義とを明らかにすることであった。

そこで、東京コーラル・ソサエティの活動歴を『ジャパン・タイムズ』掲載記事から洗い出して、トライアル期（1908）、第1期（1916-20）、第2期（1922-23）、第3期（1925-35）の4期に区分し、各期の活動の概要と演奏曲目とを明らかにした。すなわち、不発に終わったトライアル期（1908）、主としてアイグルハート家によって支えられた第1期（1916-20）、2年の中断を挟んで復興を試みた第2期（1922-23）、関東大震災による中断の後、ゲーリーの指導による発展を見た第3期（1925-35）である。

その歩みの中で、メンデルスゾーンやヘンデルの作品を中心に、ブラームスやシュポア、グ

22) 'in aid of King George's Birthday fund' (1916-4-11 JT)

23) 'in aid of the King's Birthday Fund for Red Cross beds' (1917-4-22 JT)

24) 'between King George's Birthday (Red Cross) and the American Red Cross Funds' (1918-3-1 JT)

25) 'in Aid of Siberian Relief.' この時は三越からコントラバス2台が貸与されたことも感謝されている。

26) 'It was announced Sunday that the Tokyo Union Church Building Fund had benefited to the extent of about ¥500 as a result of the recital of the Tokyo Choral Society.' (1923-3-14 JT)

27) 'The proceeds of the entertainment will go to the Kobokwan, the social settlement work for children in the slums of Honjo' (1927-12-9 JT)

28) 'Thanks are due to all those members of the Joint Choral Society and of the Orchestra from Kobe, Sendai, Yokohama and Tokyo who made their journeys a gift to the Funds, who defrayed by private contribution well over half the expenses connected with the oratorio and who contributed by their time and talents to the success of the entertainments.' (1919-6-7 JT)

ノー、デュボア、ハイドン、バッハ、シューベルト、ロッシニなど、日本初演を含む多数のオラトリオや宗教曲を公開演奏したことが判明した。

東京コーラル・ソサエティの構成メンバーには英米系のキリスト教宣教師とその妻や娘が多数含まれ、演奏会の多くは福祉施設等のためのチャリティーを目的とするもので、音楽による奉仕という性格を強く持っていた。

浮沈や断絶を含みながらも、東京コーラル・ソサエティは20年の長きに亘って存続し、主要なオラトリオや宗教曲を舞台で実際に演奏することによって、人々と社会とに貢献してきた。だが、その歩みは決して平坦なものではなかった。

ニューヨーク・オラトリオ・ソサエティの成立と発展を論じた H. E. クレービールは、コーラル・ソサエティの存続に必須の三要素として、「音楽を心から愛する歌い手たち」「音楽に対する燃えるような情熱と、演奏者たちに対する敬意と高い共感性とを備えた優れた指揮者」「有能で揺るぎない意志を貫くことのできる献身的なビジネス・マネジャー」を挙げている (Krehbiel 1884, 56-57)。

東京コーラル・ソサエティの指揮者としては、第1期のフロレンス・アイグルハート、第2期のヒュー・ホーン、第3期のフレッド・ゲーリーの3名の貢献が際立っている。中でも1925年から10年近く指揮に当たったゲーリーの存在は大きい。ゲーリーは1928年6月に恩賜休暇で帰米し、1929年9月に帰日の予定だったが (1929-8-11 JT)、妻の病氣療養で延期となり (1929-11-18 JT)、1930年1月初めに日本に帰着している (1930-1-5 JT)。ちょうどその間、合唱団は公開演奏を休止しており、優れた合唱指揮者の存在がいかに重要であったかが窺われる。

ゲーリーの指揮の下、毎年続けてきた東京コーラル・ソサエティの定期演奏会は1932年で途切れている。その背景には、日本人教会音楽家の成長があるように思われる。1932年6月3日のシューベルト《ミサ曲》演奏の際、ゲーリーは中田羽後²⁹⁾にバリトン独唱をさせた。翌1933年12月16日に中田が「東京ボランティア合唱団」を振ってヘンデル《メサイア》を演奏した際、ゲーリーはピアノ伴奏で支えている。1935年の《メサイア》でも同様である。1941年11月23日付の記事によると、中田は1932年から毎年《メサイア》を演奏して10年目になるという (1941-11-23 JT)。日本に宗教音楽の芽を撒き、教会音楽家を育てるというミッションを果たして、東京コーラル・ソサエティは静かに終息していったように思われる。

参考文献

- 桑田優 2003『近代における駐日英国外交官』神戸：敏馬書房
クランメル、J.W. 編 1996『来日メソジスト宣教師事典』東京：教文館
鈴木範久監修 2020『日本キリスト教歴史人名事典』東京：教文館
ゴチェフスキ、ヘルマン 2019「東京合唱協会」『近代日韓の洋楽受容に関する基礎研究』149-160
長木誠司 2010『戦後の音楽』東京：作品社
津上智実 2022「本邦最初期の《メサイア》演奏を担った女性たち」神戸女学院大学女性学インスティ

29) 中田羽後 (1896-1974) は青山学院やシカゴ音楽院等で学び、東京ボランティア合唱団を組織して1932年から毎年、ヘンデル《メサイア》の演奏を行った。

チュート『女性学評論』36：93-109

福本康之 2007「宗教共同体の歌」徳丸吉彦他編『事典世界音楽の本』東京：岩波書店、377-380

CM1915 = Dearing, J. L. ed. 1915. *The Christian Movement in Japanese Empire including Korea & Formosa, A Year Book for 1915, 13th Annual Issue*, Published for the Conference of Federated Missions Japan.

CM1916 = Conference of Federated Missions, 1916. *The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, A Year Book of Christian Work, 14th Issue*, Tokyo: Kyo Bun Kwan.

CM1925 = Oltmans, A. ed. 1925. *The Christian Movement in Japan, Korea & Formosa, A Year Book of Christian Work, 23rd Issue*, Tokyo: The Japan Times & Mail.

CM1928 = Mayer, Paul S. ed. 1928. *The Christian Movement in Japan & Formosa, A Year Book of Christian Work, 26th Issue*, Tokyo: The Japan Advertiser Press.

Krehbiel, Henry Edward 1884 R/1970. *Notes on the Cultivation of Choral Music and the Oratorio Society of New York*, New York: AMS Press.

(原稿受理日 2022年9月21日)